

## 「第1回平成国際大学スポーツ健康学会大会」開催報告

加藤 雄一郎

スポーツ健康学部は、2017年度から新設されて始動することとなった。本年度で2年目を迎えている。本学では「学内学会」組織が運営されており、本学部でも「平成国際大学スポーツ健康学会」を組織することになった。会員は、スポーツ健康学部の専任教員と学生である。「いい学生を育てたい」という専任教員の熱い想いのもと、本会を学生の卒業研究発表の場にしようというコンセプトが決定された。本学会の設立の目的は「平成国際大学スポーツ健康学部における学術研究を推進するとともに、その成果を発表すること及び本学学生の創造的思考力を涵養すること」である。本学会大会が教員・学生の研究活動を推進、共有する場として活用されることが多いに期待される。本学部は2020年度に完成年度を迎えるが、そのときには学生生活の集大成である卒業研究発表会を開催する予定にしている。それに向けて2019年2月5日に第1回平成国際大学スポーツ健康学会大会を開催することにした。

学会大会では、「スポーツ健康学部生のコミュニケーション能力・体力・学力」というテーマでシンポジウムを3演題企画した。いずれの演題も本学部生を対象とした調査研究であり、学生の3つの能力に関する結果のフィードバックと今後の課題を教員・学生で共有するという意味で非常に有意義なシンポジウムとなった。1つ目は、水國先生による「1期生のコミュニケーション・スキルに関する特徴と今後の課題：縦断的研究の経過報告」であった。1期生のコミュニケーション・スキルの特徴は、表出系（表現力、自己主張）よりも管理系（自己統制、関係調整）、反応系（解読力、他者受容）を得意としていることが報告され、表出系をどう伸ばすかが今後の課題として挙げられた。2つ目は、久保先生による「体力、気力、努力を考える」であった。1期生の1年間の縦断的な変化として50m走が有意に遅くなり、就寝時間も有意に遅くなっていることが報告された。平均睡眠時間のモードは6時間台であり、一般的に奨励される睡眠時間よりもかなり短いことが体

力や気分、疲労感に悪影響を与えている可能性が示唆された。最後は著者による「スポーツ健康学部生の学力（国語・数学）と体力の関連性」であった。本学部生は、特に数学の学力が非常に低く、数値演算、比率の計算、課題文から方程式を立てたり、データから特徴を類推するといった論理的な思考力が苦手であることを報告した。また、学力（国語・数学）は、体力水準の高い者ほど良い傾向にあり、特に論理的思考力を要求される数学において顕著であることが示唆された。これらの報告から本学部生の課題は、表現力、自己主張、睡眠時間、数学（論理的思考）にあることが明らかにされた。今後、それらの課題と向き合い、どのように改善させていくかがファカルティとしての取り組みとなる。

次に2年生による基礎演習クラスごとの学習成果発表6演題が発表された。クラスを代表したこれらの演題はどれも興味深いテーマであり、非常に良い発表であった。聴衆は共に過ごしている仲間とはいえ、大勢の前でプレゼンテーションするのは大変なことである。発表した学生も、聴講した学生も自分たちの調べた内容を聴衆に分かり易く伝えるためにはどうすれば良いのか、論理的に説明するにはどうすれば良いのか考えるきっかけとなったことであろう。発表時間は10分であったが、時間内にいかにプレゼンテーションをまとめるかは非常に大切なことである。良い発表者は、常に時間に気を配っているものである。なぜなら発表時間は自分の時間ではなく、「聴衆のための時間」であることを承知しているからである。時間が余るからといって、時間を引き延ばすプレゼンテーションをする必要性は全くない。時間配分について、いかに練習が大切か学生たちに意識してもらおう契機となったのではないだろうか。「討論・議論」する能力を高めるには、質疑応答がとても大切である。的確な質問をするためには、発表内容をしっかり理解している必要があり、どんな質問をするかは非常に重要である。また、質問に対してしっかり受け答えができるかが発表者に

は求められる。本学部生には、これらの能力を3年次から始まるゼミ活動等を通して学んでいって欲しいと思う。そうすることで、水國先生がシンポジウムで指摘された表出系のコミュニケーション・スキルも向上するのではないだろうか。

第1回学会大会は、教員・学生の研究活動を活性化する上でとても有意義であった。来年は「卒業研究テーマ発表会」、再来年は「卒業研究発表会」へと発展していく。今後、学生たちがどのように成長するのか楽しみである。

